A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI

TOSABUSHI

とさぶし

高知県は、ひとつの大家族や。

高知家

No 33

kochi 再発見 discovery 新発見

TAKE FREE

着物を装う土佐の人々

Contents

特集

着物を装う土佐の人々 …… P03
宮尾登美子が愛した着物の世界 …… P04
着物を粋に着こなして …… P06
和の心を現代に紡ぐ …… P08
染織工房を訪ねて …… P12

連載

絶景にて人と出会う …… P14
土佐が語り継ぐ祭 …… P16
日曜日のTOSAレシピ …… P18
プライムトーク …… P20
集落を訪ねて …… P22
読者プレゼント …… P23

とさぶし33号の登場人物

「布工房 めろでぃ〜 播磨屋橋」の桑名真紀さん

「ごふく美馬」の店主 美馬勇作さん

「とさでん交通」の森田啓稔さん

和装ジャズシンガーMatilda（マチルダ）さん

染織作家の山本眞壽さん

「大正浪漫ふぁっしょんしょう」の実行委員・山本紀子さん

高知大学生の檜山諒さん

老舗料亭「得月楼」の番頭・松岡祐司さん

一級和裁士の山﨑華子さん

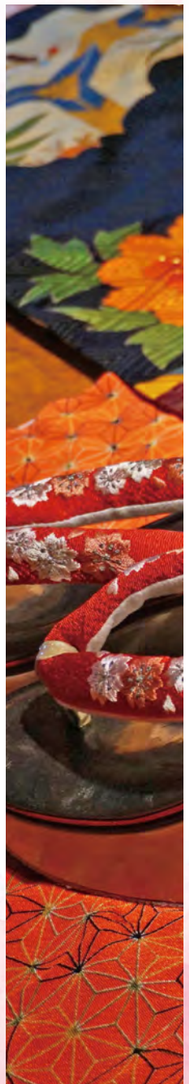
「特選呉服 いしはら」の女将・石原文子さん

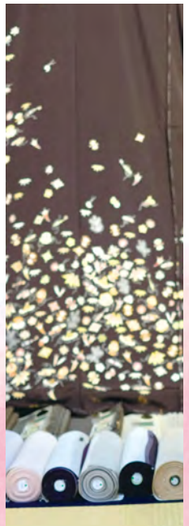
「松鶴堂」の三代目松岡幹幸さん

よみかき教室講師の川戸佳織さんと、長女のあかりさん

着物を装う土佐の人々

日本に古くから伝わる民族衣装として親しまれてきた着物。着物から洋服へと時代が流れ日本の伝統文化が薄れゆく中、着物文化を重んじ、一筋にその魅力にほれ込み、愛用し続ける人たちがいる。そんな人たちが抱く、後世へと伝えたい思いとは…。





着物を装う土佐の人々

宮尾登美子が愛した着物の世界

着物に人生を重ねつづったエッセイの言葉には
着物への慈しみがあふれている

作家・宮尾登美子がエッセイを通して伝える着物への思い

着物姿が印象的な高知の女性といえば、大河ドラマ「篤姫」や「義経」などの原作を描いた歴史に残る人気作家・宮尾登美子ではないだろうか。高知に生まれ、21歳で作家の道を志し、40歳目前まで故郷・高知で作品を描いた。そのヒロインの多くは、着物姿が目に浮かぶ日本的風土や古いしきたりの中で生きる女性の姿。そしてまた、自身も着物を愛用し、出版記念や自著原作の映画発表などの折には、作品に合わせて調えた着物で登場し、晴れの舞台を飾った。宮尾登美子70年の歴史をたんすの中の着物とともにつづった「きものがたり」や「花のきもの」などのエッセイには、着物にまつわるさまざまな思い出がつづられている。

「きものがたり」の著者である宮尾登美子さん。着物は、染織作家・山本眞壽さんの作品。

一冊一冊手作りされた手のひらサイズの豆本にも着物を使用。宮尾さんの着物愛が伝わる貴重な作品。

宮尾さんの着物への愛着は「着物が好きだから、という単純なものではない。人生とともにいつもそばにあるもの、という感じがします」。宮尾文学に精通する学芸員の岡本美和さんはそう話す。実際エッセイには、終戦後の満州やその後の人生の変転で着物を全て無くしてしまった経験、嫁ぎ先で無一文になった自分に姑が蚕を飼い、糸を取り、はたを織ってくれたことなど、いろいろな実話が当時の心象とともにつづられており、著書のあとがきでは、「女のきものにはそのときどきの悲しみやよろこび、そして大きくいえば世相まで染みついているように思います」と言葉を残している。

一方で、しきたりの厳しい花街で育った宮尾さんは、日本の四季と伝統を重んじた。「桜花らんまんの季節に桜の花模様の着物を着ると、体のなかで既に春は爛けてしまい、眺める桜も飽いてしまったような気持ちがある。桜の模様は二月の終りから三月にかけて、つまり開花するまでが着物の出番で、自ら桜を装いながら木に花のひらく日を心待ちにするのである」。

この文面からは、古き良き日本の風習を大切にした宮尾さんの感性を垣間見ることができる。

また、宮尾さんは作家として住処を東京に移してからも、高知に所縁を持ち、故郷の呉服屋「三條」をひいきにしている。「ここには山脇さんの目を通して仕入れられた京呉服がぎっしりと詰まっていて、その価値を現金にすると天文学的数字になるという。（省略）私など電話で着物と帯を注文すると、この着物に合う帯は去年お買い頂いた品で間に合います、などといわれ、なるほど、と教えられることはたびたび。客との商いに出すぎずひっこまず、客を嬉しい気分にさせてくれるあたり、達人の腕前、とでもたとえようか」。

文面にも登場する店主・山脇初子さんの他界に伴い「三條」は閉店されたが、その存在は著書の中で今もなお、伝え続けられている。晩年には、高知の染織作家・山本眞壽さんに出会い、その作品を好んで着ていた。終戦後、仁淀川のほとりに14年間暮らした宮尾さんにとって、仁淀川の水と桑の葉で育った蚕の糸を紡ぎ、郷土の草木で染めて織り上げた眞壽さんの着物は、郷土の風景を思い出させるものだったのかもしれない。

高知県立文学館では宮尾文学の世界に出会える

高知県立文学館には、ご本人とご遺族より数々の作品や愛用の品々が寄贈されており「宮尾文学の世界」室の一角にある「宮尾さんの愛したものたち」のコーナーでは、季節折々に着物を入れ替えて展示している。

着物を粋に着こなして

着物文化とアメリカ音楽をつなぐジャズシンガー

和装ジャズシンガー
Matildaさん

「幼少期は日本舞踊をしていたので、着物は身近な存在でした」、そう話すのは土佐清水出身の和装ジャズシンガー・Matildaさん。3歳から着物で踊り続け、9歳になる頃には自分で着られるまでに。幼少期から着物を着る機会が多かったそんな彼女が、和装ジャズシンガーとして活動するようになったきっかけは、平成27年のソロデビュー。「プロとしてお客さまの前に立つのだから、堂々とした姿で」という思いから。彼女にとって慣れ親しんだ着物は「精神安定剤」のようなもの。着物を着ることで、緊張したそぶりを見せずに心を落ち着かせ歌に集中することができた。そんなれ初めで、ならではのスタイルを貫く彼女の夢は、「いつか振袖を着てアメリカで歌いたい」。

一番のお気に入りは、15歳の時に日舞の発表会に合わせて母からもらった黒地の大振袖。

着物を着ることで伝統の風格を受け継ぎ新しい人々を迎え入れる

得月楼番頭
松岡祐司さん

「得月楼」といえば、土佐の宴会文化を牽引してきた、創業150年の歴史を誇る老舗の料亭。宮尾登美子の著作「陽暉楼」の舞台にもなった全国的に知られる名店。松岡さんは、そこで、着物に身を包みお客さまをもてなす番頭を務める。いわゆる、「着物男子」だ。首元の襦袢（じゅばん）に鮮やかな唐紅を差した立ち姿からはなまめかしささえ感じる。「着物でなければ、伝統ある得月楼の番頭は務まらない。それに、この着物姿が若い人々の印象に残れば、もっといろいろな人に得月楼を知ってもらえますからね」。そう言って伝統ある得月楼の風格を継承しながら、新しく訪れる人々を迎える松岡さん。彼にとって着物は、「得月楼」の伝統と風格を守り抜く上で欠かせない仕事着になっている。

実家の「得月楼」を継ぐまでは、テレビ局に勤めていた松岡さん。広報役もこなしている。

親から子へ目指すは着物の伝道師

よみかき教室講師
川戸佳織さん あかりさん

着物を着て、周りや子どもに着物の良さをつないでいきたいという思いを込めた「着繋ぐ」を表現し続ける川戸さん。思い出の一着を我が子へつなぐことができるのも、着物ならではの魅力だ。

着物がいくつもの縁を結ぶ

とさでん交通
森田啓稔さん

「着物を着ると、いろんな人が声を掛けてくれるんです」、そう話す森田さん。着物を着ることで相手に敬意を払いつつ、自分も褒められる。お互い心地よいのが着物の魅力だという。

和洋ミックススタイルでオリジナルコーデ

高知大学生
檜山諒さん

伝統的な着物の良さを大切にしながら、洋服でアレンジを加えて着こなす檜山さん。「みんなが思っているより、着物は安価で手に入り、楽に着られるという事を知って欲しいです」。

自分の仕事と同じく守るべき日本の文化

松鶴堂 三代目
松岡幹幸さん

「着物に興味を持ってもらえたら」と、式典、会合、披露宴などスーツで行くような場所や、茶席の手伝いの際に着物を着るという松岡さん。着物は公私ともに欠かせない存在だという。

着物を装う土佐の人々

和の心を現代に紡ぐ

生業として、個人として誰よりも着物の魅力を体感し、そしてメッセージを発信し続ける人々の思い。

着物と伝統芸能を織り交ぜ高知から全国へ

高知に拠点を置きながら、第一線で活躍する伝統芸能の演者や夫人らと深く関わり、業界でその名が広く知られている美馬勇作さん。もともと大の「芝居好き」「着物好き」ということもあり、若かりし頃からのご縁がつながって今日に至ったそうだが、そんな中でも美馬さんが特別な思いを寄せる2人の女性がいる。一人は、高知市にあった京呉服「三條」の社長、山脇初子さん。実家である「美馬旅館」が代々三條と付き合いがあったこともあり、高校生の頃から三條に出入りしていた美馬さんは、持ち前の感性や才能を社長に見出され、やがて三條で働くようになる。「三條、そして社長とは劇的な出会いでした。東京・銀座の有名店にも劣らぬ一流の品、一流の仕事に触れ、社長直々に三條イズムをたたき込まれたおかげで、今の私ができていると言っても過言ではありません」。

そしてもう一人が、歌舞伎役者「高麗屋・松本白鸚」を陰で支え続ける妻・藤間紀子さんだ。藤間さんとの出会いは三條で働く前、二十歳から2年間、東京の国立劇場で美馬さんが働いていた時にさかのぼる。歌舞伎や日本舞踊の、一流の演技、話芸、衣装を間近に見られるとあって熱心に仕事に打ち込んでいたところ、松本幸四郎（当時は市川染五郎）さんを紹介されて食事をする仲になり、それからほどなくして母である藤間さんともつながったのだそう。「東京から高知に戻って三條で本格的に働くことになった時、それを紀子奥様に伝えると『一度着物を見せて』と。早速劇場にお持ちして、その時初めてお求めいただいたのが、当時デビューしたばかりの松たか子さんの着物でした」。その後も、女性誌「ミセス」の中で藤間さんの対談相手として抜てきされたり、東京での展示会を後押ししてくれたりとお付き合いは続いた。「紀子奥様には東京で展示会をする機会を与えていただき、そのおかげでお客さまが広がりました。この方無くして今日はありません」。

実は美馬さん、小学校低学年の頃には杉村春子さんや山田五十鈴さんら、名女優の粋な着物姿に魅せられていたというから、その熱意は筋金入り。そんな幼少期の記憶や青年期の経験もあって、これまでの自分を築いてくれた伝統芸能界に恩返しがしたい、また着物を着て芝居を見る良さを知ってもらいたいと、平成20年から行っているのが「ごふく美馬 伝統芸能の夕べ」。歌舞伎俳優や和楽器奏者を高知に招き、趣向を凝らした公演を年1回のペースで行っているのだ。「芝居も着物も『本物』を見て、触れて、そして着物の場合は着てみないと、本当の価値が分からないものだと思います。敷居が高いと思われがちですが、この素晴らしい世界観を多くの人に知ってもらい、日本が誇る伝統をつなげていけたらと思っています」。

創業20周年記念プロデュース公演より。松本幸四郎（十代目）さん市川染五郎（八代目）さん父子による「連獅子」。

逸青会10周年記念公演より「煎じ物」。左から、尾上菊之丞さん、茂山逸平さん、藤間勘十郎さん。

「藤間紀子 私のきもの生活」より。松本紀保さん、藤間紀子さんと並んで、美馬さんが見立てた着物を着る女優の松たか子さん（右端）。

美馬さんが責任編集を務めた、大女優・山田五十鈴さんの舞台の全てをまとめた豪華写真集。（発行 ごふく美馬）

今は亡き三條の山脇初子社長。美馬さんにとって師匠であり恩人でもある特別な人。

美馬勇作さん

幼少期から日本の伝統芸能や女優、衣装に関心を抱き、高校生の頃から京呉服「三條」に出入り。その後国立劇場に勤務、三條で修業の後開業。四万十町の実家「美馬旅館」の経営にもあたる。

ごふく美馬
高知市追手筋1-9-11-1F
☎／088-824-5298

Column

着物で町おこし

「大正」の名を生かし、
大正から日本の美しい着物文化を全国へ！

春になると、四万十町大正地区では、町おこしの一環として「大正浪漫ふぁっしょんしょう」が開催される。地元の婦人部「大正美人の会」が主催となり、平成25年に始まったイベントでは、色鮮やかな着物を披露するファッションショーや着付け体験が行われ、老若男女を問わず多くの人でにぎわいを見せる。「原動力は生まれ育った大正を盛り上げたい、日本の大事な着物文化を継承したいという思い。着物ブームが訪れている今こそ、大正と着物の魅力を知ってもらえるチャンスが到来したと感じています!」、実行委員の山本さんはイベントを通してたくさんの人々にメッセージを届けている。

実行委員を務める山本紀子さん。幼少期から親しんできた着物への思い入れは強い。

地元高校生も着付け体験に参加。中には「初めて着物を着た」という生徒も。

土佐和紙の伝統を生かした土佐紙布

木綿を経糸、土佐和紙を緯糸にして織り上げる「土佐紙布」が誕生したのは、平成31年春のこと。日本の伝統文化と、土佐の伝統工芸を組み合わせた紙布は、着物用の「帯」に仕立てられた。「手紡ぎと手織りの表情に癒やされ、手触りも締め心地も軽く、ナチュラル。思い通りの作風に仕上がり、感動もひとしおでした」。発案者の石原さんはうれしそうに当時を振り返る。

もともと素朴で優しい風合いの手仕事作品が好きだった彼女は、結婚を機にこの世界に入ってからも、手仕事の技が光る着物や小物に引かれた。また、いの町在住だったことも重なって土佐和紙と呉服を組み合わせた「いいもの」ができないかと、いつしか考えるように。そんな折見つけたのが、紙糸を織り上げる紙布。「存在は知っていましたが、現物に触れたのはその時が初めてでした。自然の素材と手仕事の風合いを感じて、これで帯を作れば面白いなとイメージが湧いたんです」。

そんな構想から、イメージ通りの作品に仕上げるために試行錯誤を繰り返すこと、実に5年。「ひだか和紙」が手掛ける、透明かつ粘り強さを兼ね備えた典具帖紙と、福井県在住の工芸作家・竹内康子さんとの出会いによって、「土佐紙布」は完成した。そうして、土佐紙布を使った第1号の商品としてできあがったのが、女性用の名古屋帯と男性用の角帯。今後は布小物を仕立てたり、機械織りでも作れるようにならないかなど思案中の石原さん、「より多くの方に土佐紙布に触れていただき、土佐和紙、そして着物の素晴らしさを知ってもらいたいですね」。

石原文子さん

創業約50年を誇る老舗呉服店「いしはら」の女将として、夫で店主の伸治さんと共にお店を切り盛り。結婚・出産を機にいの町に移り住み、以来26年ほど過ごしているという。

特選呉服いしはら
高知市南はりまや町1-16-5
☎／088-880-0047

「色を決めて心の赴くままに織る」という竹内さん。出来上がった土佐紙布はそれぞれに違った魅力があふれている。

木綿と土佐和紙で織る土佐紙布。「とても軽くて素朴で優しい雰囲気が気に入っています」。

着物を新たなかたちにリメイクして残す

子どもの頃から日本舞踊を習い、また何かの折に着る機会も多く、着物は常に身近な存在だったという桑名さん。今から約40年ほど前に高知市内に衣料品店を立ち上げ、そして現在は高知市はりまや町のお店でアンティークの着物の販売や着物のリメイクを手掛けている。「着物を捨てたという話をよく耳にします。普段着として着物を着ていた世代が高齢になり、自分では着られないし保管するスペースも無く、結局捨ててしまうという人が多いんです」。そんな話を聞くたびに、どうにか残すことはできないかと考えるようになり「着物のリメイク」にたどり着いた。

店に並ぶのは、大正時代や昭和初期に作られた色鮮やかな着物をはじめ、コート、ワンピース、バッグ、クッション、傘まで、着物や帯をリメイクした品がズラリ！　洋服はどれも普段着として着られるものばかりで、着物ならではの柄が生かされている事はもちろん、軽くて着やすいと機能性も兼ね備えているのだとか。現在は毎月30着ほどを仕立てるそうで、実際に着物をリメイクした方からは「母がそばにいるよう」「親戚一同で涙ながらに故人を懐かしんだ」など喜びの声が続々と届いているという。

「できれば着物をそのままのかたちで受け継いでもらうのが一番なんですが、現代ではどうしても難しい面はあります。だったら思い切ってリメイクしてでも残してもらいたいんです。着物にはその時代の文化や豊かさが反映され、着ていた人の思い出もたくさん詰まっていますから。眠っている着物がないか、一度ご実家のたんすの中をのぞいてみてください」。

桑名真紀さん

子どもの頃から着物に慣れ親しんできて、現在はアンティークの着物の販売や着物のリメイクを手掛けながら勉強会やイベントも主催し、着物文化の継承に努めている。

布工房 めろでぃ～ 播磨屋橋
高知市はりまや町1-5-11
☎／088-861-1073

着物を着るためのイベントも主催。他に「着付け教室」や「きもの検定講座」も毎月1回ずつ行っている。

店内に並ぶ着物をリメイクした洋服。より手軽にできるように最近はイージーオーダーで仕立てている。

着物を装う土佐の人々

染織工房を訪ねて

作家・宮尾登美子も愛した紬の着物の原点を求めて。
手紡ぎ、手染め、手織り。昔ながらの自然製法に出会う。

日本の伝統技術で糸を紡いで染めて織る 染織作家・山本眞壽さんの染織工房へ

「着物は日本の民族衣装であり日本のプライド、胸を張って着て欲しい」、そう言って工房を案内してくれたのは、染織作家の山本眞壽さん。高知市といの町に染織工房を構える数少ない染織作家の一人だ。高知に生育する四季折々の草木で染めた絹糸を用い、高知の自然や心象風景をイメージして織り上げる作品は、着物に仕立てることで一層その魅力を増す。そんな伝統的な自然製法で創り上げた作品の数々は、世界各地で開催した着物展で多くの感動を集めている。

山本さんが染織を始めたのは、40年ほど前。はた織りから始まった創作活動は、染色、染料の採取へと幅を広げ、やがて自ら養蚕を手掛けるように。「草木染めは自然由来の温かさを感じることができます。色に深さがあり、時を超え、色が移ろったとしても、それなりの色合いと色の調和が保たれ、しっくりとなじむ色に育つんですよね。そうして草木染めをしているうちに、今度は糸から紡ぎたいと思うようになって」。日ごとに増していった創作意欲は、自ら蚕を飼い、その蚕から糸を紡ぐまでになっていた。山本さんが紡ぎ出す絹糸は、既製品には表せない美しい光沢と柔らかい手触りを実現し、多くの注目を集めた。日展では11回連続で入選、作品の一つは高校国語の教科書の表紙を飾り、ついに天皇皇后両陛下をはじめ、各宮家への献上品を制作するまでに。

そうして国内で活躍する中、今度は「日本の着物や養蚕の文化を継承する道を探りたい」と日本のプライドを背負って有志とともに海外へ。平成12年に招かれた、ドイツのハンブルク民族学博物館の企画展では桜などで染めた50点の着物を披露。それが呼び水となり、着物展は世界各国の美術館・博物館でも行われた。「ヨーロッパをはじめ、アフリカのタンザニアなど20数都市に行きましたが、着物はたくさんの都市でとても高く評価されました。着物は洋服と違って直線裁ちなので、着る人の体型を選ばない日本ならではの民族衣装。現地の方に即興で着付けて差し上げると、みなさんとても喜ばれましたね」と誇らしそうに当時を振り返る。日本の伝統技術を駆使して織り上げた渾身作は、現地の人々から予想以上の共感を得、「ヴォーグ」「エル」といった世界的なファッション誌をはじめ、現地の新聞など、さまざまなメディアで取り上げられ、現在もデンマーク王立工芸博物館に収蔵されている。

それから10年経った今では、染織作家として創作活動を続ける傍ら、「日本の伝統文化を後世に伝えたい」と、小中高等学校などを対象に課外授業を受け持ち、未来を担う子どもたちに、染織や養蚕の面白さを伝えている。「昔は養蚕というと、日本を代表する産業の一つでした。今は着物文化が下火になって、養蚕を行う人が減ってしまったけれど、これはなくしてはいけない日本の伝統文化です。それを次世代につなぐのが私の使命と思っています」。熱心に活動を続けてきた山本さんは、平成30年に文部科学大臣より「地方教育行政功労者」として表彰を受けた。

染料からこだわる山本さんの作品は、同系色でも何種類もの発色があり、作品になったときのグラデーションが見事。優しい色合いと風合いを兼ね備えている。

桜と栗で染めて織り上げた35年前の着物を着て取材に応じてくれた山本さん。長い年月を経た着物とは思えないほど粋でお洒落。

デンマークのコペンハーゲンの着物展において現地メディアの取材を受ける山本さん。

糸をとった蚕は透明になり、幼虫の姿が現れてくる。

養蚕・染織の工程をのぞいてみよう!

小中高等学校を対象に行う課外授業では、蚕から糸を紡ぐ体験や、草木染め、はた織り体験などを通して、次世代に日本の伝統を伝えている。また、いの町に構える染織工房では、はた織り体験を受付中。

染織工房 はた舎
吾川郡いの町鹿敷1226 土佐和紙工芸村敷地内　☎／088-892-3872

全て手作業で蚕から糸を紬ぐ。一つの繭から約1500mの糸がとれるという。

草木を釜で煮出して染めを行う。写真の植物は、越知町で採取した柳と萩の葉。

草木で染めた糸。天然の優しい色合いと絶妙なグラデーションが印象的。

はた織り機で布に仕上げていく。着物を一着分織るのに約30万回シャトルを飛ばす。

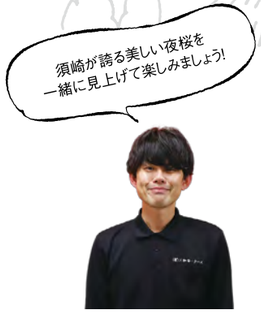
須崎市桑田山の「雪割桜」といえば、高知県では、ひと足早く春の訪れを告げる桜の名所として有名。まだ雪が降る2月の中旬から花を咲かせるため、地元の人々にその名で呼ばれはじめ、長きにわたって親しまれてきた。起源は、70～80年前、愛媛県松山市の「椿神社」の桜の枝をもらい受けた地元住民が接ぎ木して大切に育て、保存会が受け継いできたものといわれている。山全体でおよそ1000本にもなる雪割桜が一斉に咲き誇れば、辺り一帯に独特な桃色や濃いピンク色の桜の花が舞い散り、幻想的な景色が広がる。

そんな雪割桜が近年、特に若い世代から人気を集めている。8年前から開催されている「雪割桜キャンドルナイト」という夜桜のイベントが発端になり、SNSで話題が沸騰。まだ寒い2月の一夜限りのイベントに2500人以上もの見物客が訪れ、ライトアップされた雪割桜にカメラやスマートフォンを向けては、撮影を楽しむ。

濃いピンクの桜吹雪がライトアップされる一夜。
その幻想的な光景が若者の来場を誘う。

イベントを手掛けるのは、地元の若い世代が集まる「BOKKENT」という団体。近年では地元住民の老若男女が大勢協力して行われている。代表の堅田大輔さんはイベントに対する思いをこう話す。

「実は自分自身、地元出身なのに、若い頃に雪割桜を見たことがなくて。訪れた時は、あまりの美しさに感動しましたね」。一般的に、若い世代ほど地元の良さに目を向けづらい。でも、「須崎は良いところだよ！」と胸を張って言えるようになって欲しい。そう考えていた堅田さんだからこそ、若い世代の参加を誘うイベントを実現できたのだろう。地元の小学生たちに竹提灯の絵を描いてもらったり、須崎総合高校の書道部に題目を書き下ろしてもらったり。失敗や苦労も多かったが、イベントを訪れた若い子達が「わあ、きれい！」と大声ではしゃいでくれた様子に報われたという。「胸を張って、地元の良さを紹介できる」そんな若者たちの手に未来へのバトンが渡された。



BOKKENT 代表
堅田大輔さん

須崎市出身。家業の自動車会社で働く傍ら、地元の活性化活動に参加。須崎在住の若い世代が中心に集まる「BOKKENT」は、「遊ぶように楽しみながら地元を盛り上げる」をモットーに、地元の幅広い年齢層の人達と協力しながら毎年の「雪割桜キャンドルナイト」を主催している。

絶景にて人と出会う

Spot 11

若者の地元愛で新たに生まれた夜桜

雪割桜

須崎市で受け継がれてきた伝統の雪割桜。
2月の雪が降る中、ひと足早い桜吹雪をキャンドルが照らす。
それは、「若者に地元の良さを知ってほしい」という若者たちの思いによって
生まれた一夜限りのキャンドルナイト。
より若い世代の人々に、地元の名所が受け継がれてゆく。

土佐が語り継ぐ祭

古き良き伝統文化を後世に伝えるべく
奔走する祭り人達の思いを胸の内にせまる！

空に舞う炎を仰ぎ、健康を祈る
どんど祭り

●安芸郡田野町 二十三士公園
※令和3年の開催は中止

日本各地で行われる小正月の火祭り「どんど焼き」。悪魔払い、無病息災を祈って、門松やしめ縄などを集めて燃やす日本の伝統的な文化で、どんどさん、さんくろうなどともいう。

年初めに行われる伝統的文化

毎年1月の第2週目の日曜、奈半利川河川敷にある二十三士公園では、年初め一番の大祭「どんど祭り」が開催される。青竹を骨格として、やぐらを組み、これに火を投じて門松やしめ縄、お札などを焼いていく。前日に準備するやぐらの高さは約7メートルほどで、豪快に燃え上がる炎は、地上から10メートルほど高く上がる時もあるという。中でも一番の見どころは、燃え盛る炎とともに聞こえる、竹が割れる音やはじける音。「パチパチ」と小さな音が聞こえ出したと思いきや、炎の中で竹がはじける「ドーンッ」と迫力のある音が響いたり…、参加者はこの音に耳を傾け、炎に目を向けて、1年の健康と地域の振興を願う。炎が弱まると、長い竹串を使い、お餅を焼き、このお餅を食べることで、1年間、無病息災で過ごすことができるといわれている。

祭りを通じて培う地域交流

今では、メディアが取材に訪れるほど大規模な祭りとなった「どんど祭り」だが、そのルーツは一人の教職員の「子どもや地域住民が楽しめる、地域に根差した行事をしたい」という思いだった。安芸郡東洋町に赴任し、どんど焼きの文化を知った元校長先生が田野町上地・日野地区に持ち帰ったことがきっかけとなり、昭和59年に第1回目が開催。その後、2回・3回と年数を重ねるごとに、評判を聞きつけた住民が町内外から訪れるように。代々、どんど祭りの主催を務める上地・日野地区長の桑名さんは、今後の展望をこう語る。「どんど祭りは今まで一度も中止になったことがなく、地域住民の協力のおかげで成り立ってきました。高齢化に伴い、大変な事もありますが、健康と団結力を願って長く続けていきたい。今後も、田野町の伝統的文化として残していきたいです」。ルーツとなった思いを受け継ぎ、祭りが続くことを願うばかりだ。

上地・日野
地区長
桑名 良学さん

真冬に海水をかぶり防火祈願
水浴びせ

●幡多郡大月町古満目地区
※令和3年の開催は中止

大月町の小さな漁師町で、毎年正月に開催される「水浴びせ」。若者に冷たい海水を浴びせることで、地域の防火と厄落としを祈る。水をかぶって凍える若者の顔には笑顔がこぼれる。

江戸時代から続く防火祈願の奇祭

大月町古満目地区の伝統神事「水浴びせ」の起源は江戸時代にさかのぼる。漁師町である古満目は、身を寄せ合うように集落の家々が近距離で建ち並び、冬になると西からの冷たい強風にさらされる。そんな小さな集落に、大火が起きたのは寛文2年（1662年）のこと。1軒の民家で起きた火事が、瞬く間に家々に燃え広がり、地区のほとんどを焼失させるという大惨事となった。以来、「そんな大火事がもう二度と起こらないように」と一心に願い、防火祈願の祭事が始まった。それが、今日まで受け継がれる「水浴びせ」奉納行事は、「奇祭」ともいわれるほど独特。凍るように寒い冬の日に、祭りを取り仕切る役員たちが、ほとんど半裸に近い浴衣姿の若者に、バケツいっぱいの冷たい海水を頭から浴びせ掛ける。会場にはたくさんの地域住民やカメラマンが集まり、若者らに激励を送る。何度も水をかぶり、ぶるぶると凍えながらも、若者たちは笑顔を絶やすことはない。こうして毎年、古満目の防火と、かぶり手である若者たちの厄落としが祈願される。

温かいお風呂をためて待っている

「多い時期では20人以上の若者が参加していたが、今ではもう、その半分ほどになっている」と話すのは、古満目地区長の中野清光さん。祭りの役員を22年もの間務め、自身も中学生の頃に水をかぶった経験者。「伝統だから絶やすことはできないですね。毎年、必ず訪れる若者がいるから、彼らのためにもやめたくない」。近年では、水浴びせの話題を聞き、「物は試し」と興味本位で参加する若者も少なくないという。そんな若者の参加者を中野さんは喜んで迎える。「温かいお風呂をためてまっていますよ」。

大月町古満目
地区長
中野 清光さん

LINE@でも
情報配信中！

とさぶし
と友達になろう！

その① QRコードを読み込み「とさぶし」と友達になる

その② 記事の閲覧や
プレゼント応募、
最新情報を受け取れる

日曜日のTOSAレシピ

今回のテーマ
工芸品やアクセサリーなどもそろう日曜市
winter

今回は趣向を変えて、
おなじみの日曜市に並ぶ工芸品とそのお店、
さらに意外と気軽に楽しめる
「コケ玉」作りの材料や手順をご紹介。

グルメや農作物はもちろん工芸品のお店も多い日曜市注目しながら散策してみて

「日曜市」といえば、お店を出す生産者さんが手塩にかけて育てた農作物やその加工品、さらに芋天や田舎寿司などのグルメを想像する人が多いはず。そんな中、実は職人さんお手製の工芸品を提供するお店も多く並んでいるのをご存知だろうか？例えば、中の橋通り近くに出店する中山さん。当初は花の球根などを販売していたが、ご主人の宿毛市への転勤をきっかけに珊瑚を使った商品の取り扱いを開始。自ら珊瑚を加工しており、「珊瑚の製品は高いと思うかもしれんけんど、ウチのは手頃やきねぇ」と笑う。他にも、土佐打刃物や焼き物、金物細工や木工製品などの伝統的な物から、ガラス製品やセメントで作った小さな電車の模型など、老若男女が楽しめる工芸品も多数。食事の買い出しや食べ歩きをしつつ、これらの工芸品のお店に注目しながら日曜市を散策するのもまた楽しい。

ランプワークという技法を用いたさまざまなガラス製品をそろえる「TOMOMATSU GLASS MARKET」。

小玉さんのお店には、全国から集めたカゴや木工製品、お箸やスプーン、草履などあらゆる工芸品がそろう。

いろんな形の珊瑚や天然石を自ら加工し、アクセサリーやキーホルダーなどに仕立てて販売する中山さん。

「新荘川焼」の陶芸家である猪狩さんのお店では、土鍋や食器、塩つぼなどさまざまな焼き物をそろえる。

セメントで手作りした精巧な路面電車やミゼット、グランドピアノ、ミニハウスなどを販売する田中さん。

いろんな刃物の販売はもちろん、もともとは鍛冶屋であるため、刃物研ぎの受付も行う「小川鍛造」。包丁の柄はカスタマイズも可能。

盆栽や苗木などの植物や骨董品のほか個性的なお店が多数並ぶ高知城近辺

大橋通りを西へ過ぎた通り、いわゆる「日曜市6丁目」と呼ばれるエリア。こちらには、盆栽や苗木、さらに今回作り方を教えてもらった「コケ玉」など植物系の商品をそろえるお店や、打刃物、金物、骨董品や雑貨などをそろえるお店が多数並ぶ。令和元年10月から日曜市に出店を始めたという盆栽の店「永心園（としんえん）」の山岡さんは、「同じ盆栽でも、お店によって大きさや作風が異なる。それぞれのお店を見比べてみてほしい」と語る。中にはその場で手書きした表札を販売するお店も。「廣田表札工芸」の廣田さんは、日曜市での出店は3年ほどだが、この道40年の大ベテラン。「名前とか店名以外でも好きな言葉を書くきねぇ。なんでも言うてよ」と、美しい文字で表札を作ってくれるのはもちろん、ノリの良い接客も魅力のひとつ。高知城を眺めつつ、ぜひのぞいてみて。

高知市

日曜市

元禄時代から始まり、その歴史は300年以上を誇る伝統の市。街路市としては日本一の長さを誇り、全長1kmもの範囲に300以上のお店が並んでおり、その様は圧巻の一言。野菜や食べ物などをそろえるお店のほか、今回紹介した工芸品や骨董、雑貨を取り扱うお店も多数。冬季は6時頃から15時頃まで開催。

会場／高知市追手筋
☎／088-823-9456
（高知市産業政策課）

西端に店を構える廣田さん。小さな表札のほか大きな表札もオーダーできる。気軽にのぞいてみて。

盆栽歴45年という永心園の山岡さん。小さいながらも存在感があり、見ると心が落ち着く盆栽をそろえる。

広岡さんのお店では、コケ玉のほかテラリウムやリース、季節を感じるドングリなども販売している。

普段は別注家具を作り、その傍らで仕立てた木工製品を販売する秋本さん。カッティングボードが人気。

香南市出身で、知人に誘われて平成25年9月から日曜市での出店を始めた広岡さん。イベントなどでワークショップも行っている。

意外と手軽に作れる！

コケ玉

材料

コケ・・・・・・・・・・・・・・・・適量
※コケはホームセンターや広岡さんのお店などで購入可能
好きな植物の鉢・・・・・・・・適量
※多肉植物やサボテンなど水を好まない植物は向かない
糸やひも（植物由来の物）・・・・適量

※コケ玉の管理方法
急激な温度変化や乾燥に注意し、直射日光の当たらない明るい場所に置く。週に1～2回、土の中の空気を抜くように水を含ませる。受け皿に水はためないこと。

手順1

鉢から出した植物の土部分を、緑色面を下にしたコケに乗せて包む。紙で土部分を包んでおくと作業しやすい。

手順2

手の中で動かしながら、糸でぐるぐる巻きにする。コケが慣れるのに数ヶ月かかるので、糸はきつめに、多めに巻くのがコツ。

手順3

余った糸を切り、切れ端をハサミの先でコケに押し込む。ひもの場合は両端を結ぶ。ハサミでコケの長さを整えれば完成!

プライムトーク

土佐の文化を受け継ぐ者たち

高知の風土に育まれた「土佐人」たちは
今日もそれぞれの分野から「土佐の風」を発信
そこに新たな文化を重ねながら

一級和裁士

山﨑（やまさき） 華子（はなこ）さん

【プロフィール】
昭和59年高知市出身。中学生の頃からミシンを使っていろいろな物を作るようになり、高校卒業後は京都の和裁専修学校へ進学。その後京都の会社を経て高知に戻り、現在は個人の和裁士として活動している。

着物の本場・京都で習い、経験を積み、高知に戻ってからは独立して個人の和裁士に。個人であることの強みを生かしながら、手縫いでしかできない仕立て、着心地などを追求し、忙しい毎日を過ごす。そんな中で模索するのは「着物文化を伝えるために自分ができることとは」。

祖母と母、2人の影響を受けて和裁士の道を志す

裁縫好きだった母の影響で、中学生の頃からミシンを使っていろいろな物を作っていたという山﨑さん。1枚の生地をかたちにしていく作業が楽しくて、小物入れ、かばん、スカートなどいろいろな物が作れるようになってどんどんのめり込んでいった。そして高校卒業後の進路を考えるようになった時、ふと思い出したのは祖母の存在。実は山﨑さんの祖母はその昔、自分で着物を仕立てて着ていたそうで、よくその話を母から聞かされていたのだ。そして「私も着物を一から仕立てられるようになりたい」と和裁士の道へ進むことを決意。進学したのは京都にあった和裁の専修学校で、5年間にわたり京都の伝統ある「京仕立」に倣った基礎から応用までをみっちり勉強。また実践に重きを置いた学校だったこともあり、商品として購入された着物や、撮影で芸能人が着る着物などを手掛けることもあって、失敗が許されない経験を重ねることで腕を磨いていった。そして、一級和裁士をはじめとする在学中に必要とされる資格は全て取得して卒業。京都の着物を仕立てる会社で数年働いた後高知に戻り、プライダル会社勤務を経て平成30年に独立した。

個人であることの強みを生かして自分にしかできない仕立てを

個人の和裁士として歩み始めた山﨑さん。独立してから今までずっと呉服屋や衣装店などとは提携しておらず、全てお客様「人ひとりとやりとりをしているそう。「最初に知り合いの方にお仕事をいただいて、その方が次の方を、その次の方がまた次の方を、という感じでお知り合いをご紹介いただき、ご縁だけでここまでやってこられました」。また、個人であるがゆえにお客様に直接会う機会も多いが、それも仕立てをする上で欠かせない重要なポイントに。「間に呉服屋さんを挟んで、お客様に会わずに仕立てる和裁士もたくさんいますが、私の場合は直接お会いして採寸から行うので、より体型に合い、いろんなご要望に添えられるよう心掛けています」。例えばお茶を習っている人の場合、着物を着て座っている時間が長いので、膝の部分に1センチにも満たないくらいの幅を持たせたり、体型の変化によって着た時にどうしても出てしまうしわをお直しで微調整したりと、着物を着る場面やお客様の声に合わせて工夫して仕立てているという。自らの手でその人の体型を把握し、さらにどんな場面で着物を着るかなど細かい話を聞くこともできるので、よりTPOに合わせた着物の仕立てができるというのだ。そんな丁寧な仕事ぶりは口コミで広がり、ご縁の数珠つなぎは今なお続いている。

京都の専修学校時代には撮影用の衣装を手掛けることも。写真は、実際に広告の撮影に使用された振袖。思い出深い一着。

今も毎年開催されている「全国和裁技能コンクール」に出場した時の1枚。当時山﨑さんは4年生で、優秀な成績を収めたとして表彰された。

多くの賞状やトロフィーは学生時代の努力の証。針山とかけはりが付いている懸吊機（けんちょうき）や、和裁電化コテなど、専用の道具を使用。

着物文化を継承するために自分にできる事を模索して

「着物」と聞くと、どうしても敷居の高さを感じてしまいがちだが「もっと気軽に楽しんでほしい」と山﨑さんは言う。結婚式など正式な場所に着る時には着物や帯などマナーが必要となるが、普段に着る場合は洋服と同じように好きな色や模様を自由に組み合わせて楽しんで、より身近な存在になることを切に願っている。そしてその「着る文化」をきちんと後世に受け継いでいきたいという思いも強い。「手縫いで仕立てた着物は、糸をほどいてしまえば1枚の反物に戻ります。昔から着物は、仕立て直しを繰り返しながら親から子へ、子から孫へと受け継がれてきました。その素晴らしい文化を守るため、そして未来につなげるよう、布地が傷まないように1針1針丁寧な仕立てをこれからも続けていきたいです」。今は着物を仕立てたり、お直しをしたり、和裁士として仕事をこなすことに精いっぱいだが、ゆくゆくは着物を着る文化、そして着物を手縫いする文化の継承にも何らかのかたちで携わっていきたいという。「日本の伝統衣装である着物の文化が無くなってしまわないよう、私にも何かできることはあると思います。日々着物と向き合いながらその答えをじっくり探していきたいと思います」。

FM高知で毎週金曜放送中の番組「プライムトーク」に出演した際のスタジオの様子。山﨑さんの出演回は12月25日、1月1日の2週にわたってオンエア。

一村一集落活動センターの強みを生かして地元を元気に

集落活動センターを訪ねて

集落活動センターといえば、基本的には市町村内のいくつかの地域がまとまって設立するのに対し、「集落活動センターげいせい」は芸西村全体で設立した、県内でも珍しい「一村一集落活動センター」。まずは地域それぞれの要望や意見をまとめるために、役場と協力して各地域の元気な人をメンバーに引き入れることに注力。集まったメンバーで地元を良くする方法を話し合い、耕作放棄地を利用したしきみとサトウキビの栽培と竹害に苦しむ竹林の整備、さらにサトウキビから作られる地元名産の白玉糖（黒糖）などを使った「加工品の開発」を目標に掲げた。それから約3年、今ではしきみ園7反、サトウキビ畑2反、さらにケーキや焼き菓子などさまざまな商品を開発・販売するまでに。会長の清岡さんは「県内でも有数の『元気な集落活動センター』だと自負しています」と胸を張る。「確かに皆さんワイワイと楽しそう。応援したくなりますね」と岡さんも感銘を受けた。

みなさんお元気で
びっくり!
お友達になりました（笑）

高知大学地域協働学部
岡 知佳さん

高知での就職も決まり、あとは卒論などを残すのみ。「大学での活動もほぼ無いので、久々に地域の方々と触れ合えて楽しかったです」。芸西村の方々ともすぐに打ち解けた。

集落活動センターげいせい

安芸郡芸西村和食甲2462
☎／0887-33-3017

「小さくても元気で輝くむら」を目指すために、保育園だった場所を活用して平成28年3月に開所された集落活動センター。現在は42名ものメンバーが在籍しており、毎週木曜日にしきみやサトウキビ畑の世話やかっぱ市へ収穫物の出品、さらに竹や木の伐採作業を実施。また、第2・4金曜日に女性を中心に黒糖を使ったお菓子の開発や製造などを行っている。なお、村外の方でも各作業への参加もできるので、体験を希望する人はセンターに連絡を。

伝統的な製法を用いた黒糖「白玉糖」を使い、半熟カステラ・チーズケーキやミルクバターなどさまざまな加工品に。地元の名産品が集まる「琴ヶ浜かっぱ市」での販売や、ふるさと納税の返礼品に活用される。

芸西村集落活動センター推進協議会会長
清岡荘司さん

読者プレゼント

とさぶしからの贈り物

たくさんの応募お待ちしています。

「とさぶし」からの
贈り物
応募締切
令和3年3月20日

クイズとアンケートに答えて応募してや!

クイズ 宮尾登美子70年の歴史を着物とともにつづったエッセイのタイトルとは?

●読者プレゼントの応募は、1人1回とさせていただきます。
●プレゼントの発表は、商品の発送をもって代えさせていただきます。
●いただきました個人情報はプレゼントの発送のみに使用します。

1

集落活動センター げいせい
白玉糖のおやつ詰め合わせ
3名様
芸西村名産の黒糖「白玉糖」を使った焼き菓子の詰め合わせをプレゼント。どのお菓子も優しい甘味が効いており、ついつい手が伸びること請け合い。

2

特選呉服 いしはら
更紗風模様の茶巾入れ
3名様
インド発祥の「更紗」の模様を施した布で仕立てた茶巾入れ。防水加工が施されており、茶巾はもちろん名刺入れやアクセサリー入れなどにも使える。

3

ごふく美馬
麻マスク 3名様
天然の抗菌防臭性があり、吸湿・放温性に優れた「洗えるラミー麻わた」を中に入れ、表面には肌触りの心地良いリネンを使用したマスク。

4

株式会社 無手無冠
ダバダロゼ 500ml
5名様
四万十町大正にある酒蔵「無手無冠」で製造される栗焼酎「ダバダ火振」に、無農薬で栽培した紫芋を浸漬した色鮮やかなリキュールをプレゼント。

5

布工房 めろでぃ〜 播磨屋橋
リメイククッション
5名様
店でもよくオーダーがあるという着物の帯をリメイクして作ったクッション。サイズは45cm×45cmで、どんな柄かは届いてからのお楽しみ♪
※写真はイメージ

とさぶしLINE@と友達なって、読者プレゼントに応募しよう!

❶スマホから左のQRコードを読み込んで、とさぶしLINE@と友達になる
❷とさぶしLINE@より「とさぶしからの贈り物」応募フォームが届く
❸応募フォームより、必要事項を明記し、読者プレゼントに応募する

※読者プレゼントの応募は「とさぶしLINE@」への登録もしくは、官製ハガキから応募できます。官製ハガキで応募される場合はお名前・発送先のご住所・お電話番号・ご希望のプレゼント番号・クイズの解答・とさぶしを読んでのご意見やご感想、今後見てみたい特集テーマをご記入の上、下記の宛先まで締切日（令和3年3月20日）必着でお送りください。 〒781-0081 高知市北川添10-15 株式会社ほっとこうち

A BRAND NEW CHAPTER @KOCHI
TOSABUSHI

とさぶし

Web リニューアル! 見てちゃ!

https://tosabushi.com

facebookもやってます!
https ://www.facebook.com/tosabushi

発行
高知県文化生活スポーツ部文化振興課

〒780-8570 高知市丸ノ内1丁目2番20号（本庁舎5階）
Tel 088-823-9793　Fax 088-823-9296
E-mail 140201@ken.pref.kochi.lg.jp

発行日：令和2年12月28日（季刊）

企画　とさぶし編集委員会
制作　ほっとこうち

バックナンバーの入手方法

お近くに配布先がない場合は、送料分の切手を送っていただくと、
受け取り次第、発送をいたします。

【送料】

1冊	140円
2冊	180円
3冊	215円
4･5冊	310円

6冊以上の場合は、一度ご連絡ください。

お問い合わせ･送付先は、
高知県文化生活スポーツ部文化振興課（上記）まで。

あなたに夢を。宝くじ 街に元気を。
クーちゃん
このパンフレットは宝くじの収益金の一部で
作成しています。

LINE@でも情報配信中!

とさぶし
と友達になろう!